

# すぎなみの街と自然

人と自然との出あいを大切に

第132号

R2.1月

杉並区

環境部環境課

環境活動推進係

## ～第7次杉並区自然環境調査を実施しました～

区では、平成30(2018)年度に第7次自然環境調査を実施しました。令和2(2020)年3月には第7次自然環境調査の報告書を発行する予定です。今号では、調査員の方々から区内の鳥、クモ、植物についてご執筆いただきましたので、ご覧ください。



善福寺川で何度も出会ったカワセミ (2018.9.6撮影)

## カワセミが当たり前の鳥になるか? ～第7次杉並区自然環境調査に参加して～

(文・写真 杉並区自然環境調査 鳥類調査員 中村 忠昌)

杉並区の自然環境調査は昭和60(1985)年度に始まり、平成30(2018)年度に実施した調査で第7次となりました。34年間も続いていること自体、他に事例の無いことで素晴らしいことですが、このデータから様々なことが見えてきます。その1つが「生物の変化」です。どんな昆虫や鳥、植物がいつ頃から現れたか、あるいは見られなくなったかという「種の消長」が分かります。さらに鳥類の場合は、ルートごとに各種の個体数を毎月記録するため、種の増減なども数値として示すことができます。残念ながら、変化の理由については、自然環境が改善したのか、温暖化や外来種が増えた影響かなどを、関連する情報から類推することになります。しかしその理由を考えることで、私たちの暮らしている地域の見えていなかった環境変化に気づくかもしれず、生きものは環境のバロメーターと考えられています。

では、今回の第7次調査ではどんな変化が見えてきたのでしょうか？報告書は現在作成中ですが、その中からいくつかご紹介します。

第7次調査で特に個体数が増えていた鳥として、多くの方に人気の鳥・カワセミが挙げられます（写真）。第4次調査の平成13（2001）年度までは多くても年間で5個体、まったく確認できない年もありました。しかし、第5次調査の平成18（2006）年度あたりから増加傾向になり、今回の第7次調査では第6次調査と比べて5倍以上となっていました。最も確認できたのは善福寺公園を含むルートですが、私の担当した善福寺川緑地沿いのルートでも7割以上でみることができました。そのため、「せっかくの撮影チャンスを逃すまい」と毎回重いカメラを持ち歩いてしまいました（笑）。

前回までの調査結果と比較すると、これまで記録のなかった4～10月でも見られるようになっていました。この時期は、カワセミの繁殖期と巣立った幼鳥の分散期にあっており、区内のどこかで繁殖している可能性があります。また、10～翌3月の数も増えていることから、周辺の地域からも移動してきているようです。繁殖が終わった個体や、その年に周辺で巣立った個体が、杉並区にやってきているかもしれません。ルート別に見ると、過去はほとんどが善福寺公園を含むルートでの記録でしたが、第6次では4ルートで見られ、今回はなんと7つのルートで観察されています。これらのルートには神田川や善福寺川があり、カワセミがこのような河川を新たな生息場所として利用し始めたようです。もしかしたら、これらの河川に魚が増えたのかもしれませんが、人との距離が近い河川でも、動じなくなったのかもしれませんが。

先のことを軽々しく予想はできませんが、おそらくカワセミは今後も杉並の街に住み続け、より多くの場所で見られるようになるでしょう。いつの日か誰でも当たり前に見られる「普通の鳥」になるかもしれません。

カワセミを例にお話しましたが、過去の詳細なデータがあることで、このような分析ができるとともに、新たな疑問も出てきます。生き物を観察すると、このように発見と疑問が繰り返し、周辺の環境にも興味が湧いてきます、これが生きものを見続ける意味ですし、楽しさでもあるのです。



善福寺川のカワセミ 2羽同時に見られることもありました  
2018.9.6 撮影



## これから注目の鳥・ワカケホンセイインコ

では他の鳥ではどうでしょう？私が気になっている鳥をもう1種だけ紹介します。それは最近区内で目立つようになったダルマインコ属のホンセイインコ（亜種ワカケホンセイインコ）です。インドやネパールなど南国が原産の外来種なのですが、日本の寒さに負けずに元気に暮らしています。しかも黄緑色で大柄な体と騒がしい声で存在感があり、飛んでいても鳴き声ですぐに気づきます。第7次調査では、市街地に普通に生活するオナガやハクセキレイよりも個体数が多く、すっかり杉並の街に馴染んでいると言えるでしょう。彼らはこのまま定着するのでしょうか？他の種との競合などの影響もないか、気になるところで、引き続き注目していきたい鳥です。



区内ですっかりお馴染みになったダルマインコ属のホンセイインコ  
（亜種ワカケホンセイインコ）  
2018. 6. 5 撮影

## さいごに

34年間の調査データを見ると、野鳥をはじめ生き物たちの暮らしがよくなりました。その中には良い変化もあれば心配なことも含まれますが、我々と生きもの達がより良い関係で暮らすためのヒントが隠されているはずです。まもなく完成する第7次調査報告書は、分厚くて難しそうに見えますが、是非お手にとって、ヒントを探してみてください。（なお、第6次までの鳥類の変化については、本誌第119号で井口氏が紹介されています。そちらもぜひお読みください）。

（了）



【写真1】 ジョロウグモの子グモの「ブルーニング（飛行グモ）」

## 「飛行グモ」について ～第7次杉並区自然環境調査～

（杉並区自然環境調査 クモ類調査員 新海 栄一）

平成 30 年（2018 年）4 月から実施していた杉並区自然環境調査の第 7 次生物調査が終了し、39 科 197 種のクモを確認することができました。クモ類については第 6 次調査までで、すでに東京 23 区で第 1 位の種数(248 種)が確認されております。その中には温暖化によって北上してきた種、ならびに外来種として当初東京湾沿岸部で発見され、内陸への侵入が予想されていた種も含まれていることから、第 6 次の調査結果は 23 区内の単独の区としてはほぼ上限に達しているのではないかとの予測もあり、今回の第 7 次調査で追加種が発見されるかどうか注目されておりました。結果としては、驚くことに新たに 28 種ものクモが採集され、区内クモ類の上限を予測することはきわめて難しいことが判明しました。しかしながら今回の結果も、第 1 次から 6 次までの調査の積み重ねがなければ分からない事実であり、継続調査を実施することの重要性が明確に示されたこととなります。

さらにクモの研究の上からは、従来は海岸部しか生息していないクモが採集され、山地にしか生息していないクモが突然出現し、また突然いなくなるなど興味ある事実が分かってきました。この現象は、クモ独特の分散方法である「飛行グモ」による、空からの飛来が確実に起こっていることが立証された貴重な調査となっております。



クモの卵は卵囊（らんのう：卵を大量の糸で包んだ袋、色々な形がある）と呼ばれる袋の中で保護されています。

卵は10～20日くらいで孵化しますが、ジョロウグモのように卵で冬越しをするクモもいます（写真2）。

孵化した子グモは1回目の脱皮をした後、卵囊から出てきます。この行動は出囊（しゅつのう）と呼ばれています。子グモは出囊すると卵囊の側でひとかたまり（写真3）になって10日間ほどすごします。

この状態は「まどい」と呼ばれ、有名な『クモの子を散らす』と言うことわざは、このかたまり（まどい）をつついた時、クモの子がぱっと四方八方に逃げる行動を表しています（写真4）。

分散した子グモはしばらくすると再び集まって来て「まどい」を作ります。「まどい」の状態は7～10日間ほどつづき、この間に2回目の脱皮をします。

脱皮がすむと「まどい」の期間は終わり、かたまりが崩れて子グモたちは一斉に高い木の上に登っていきます。



【写真2】ジョロウグモの卵のう

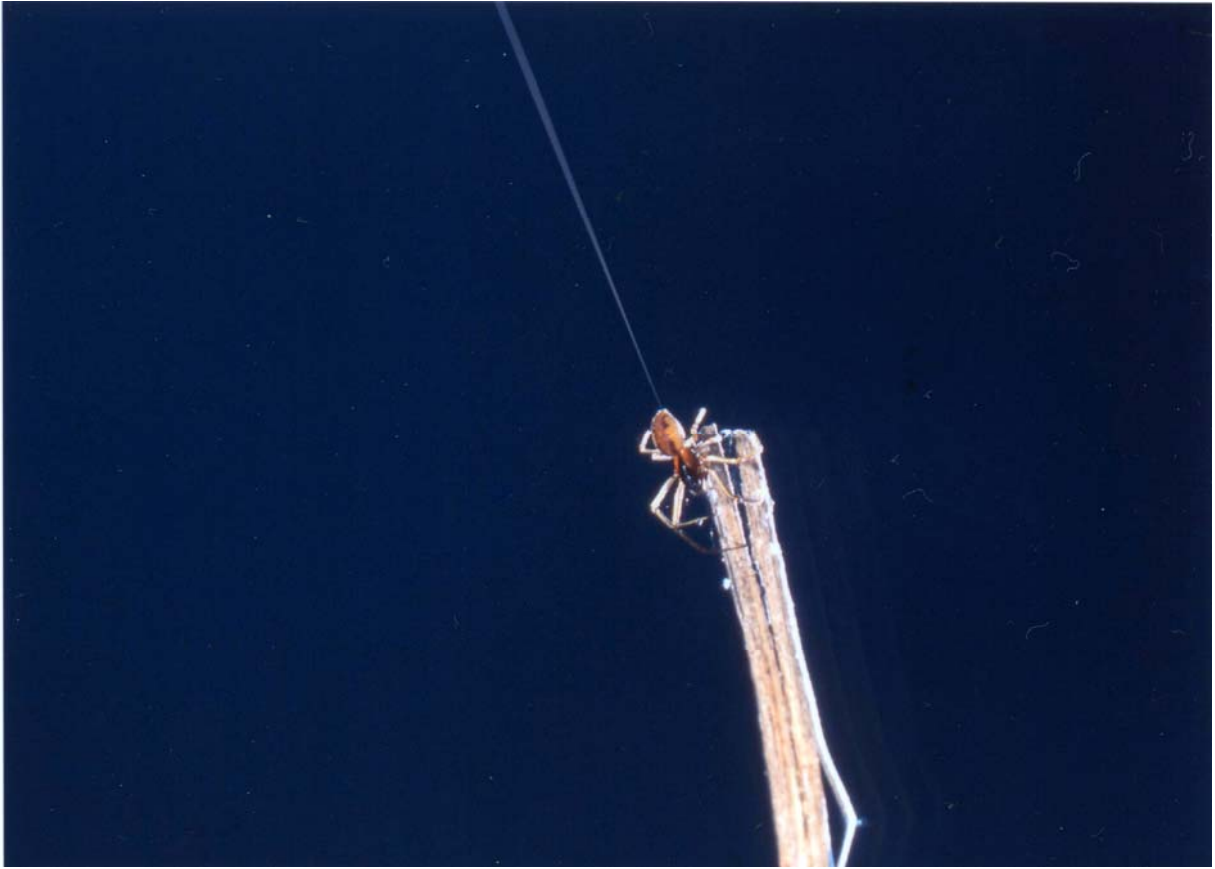


【写真3】子グモのまどい



【写真4】散らばった子グモ

枝先や葉先に到着したクモは、腹部を上に向けて糸疣（いといぼ）から糸を出して風に流します（写真5）。風はいろいろな方向から吹くので、クモもそれに合わせて腹部を風下方向に回していきます。よい風が来た瞬間、クモは掴まっていた枝や葉から脚を離し、大空に向かって飛び立っていきます（写真1）。この現象はバルーニング（空中旅行、飛行グモ等）と呼ばれ、全国あらゆる場所で発生しています。つまり全国の空にはいつも多くのクモが飛んでいて、ほんの少しの風の変化で奇跡的に杉並区内に落下してきていることとなります。



【写真5 風に糸を流すクモ】

落下地点が、たとえば荻窪駅前に降りた場合は人工物ばかりで、網を張る場所は無く、餌となる虫もないため、すぐに死んでしまいますが、善福寺公園や柏の宮公園などに降りたクモは植物の間に網を張り、たくさんの虫を食べて大きくなります。このクモが山地に生息する珍しい種類であっても、この年だけ杉並区内で育つことができ偶然発見されることとなります。昭和 60（1985）年から始まった杉並区自然環境調査の第1次～第6次調査の 30 年間の中で、わずかに1頭しか採集されていないクモが 32 種もいます。これらの中で明らかに風に乗って飛んできたと思われるクモはキバラコモリグモ、アズマキシダグモ、ヒロハヒメグモ、ハナサラグモ、オオトリノフンダマシ、ヒメアシナガグモ、ミドリアシナガグモ。マルヅメオニグモ、コガネグモ、スズミグモ、トガリオニグモ、トゲグモ、ドヨウオニグモ、ムツトゲイセキグモ、ガザミグモ、フノジグモ、オスクロハエトリ、アメイロハエトリなど 28 種が記録されていて、これらのクモは今回の第7次調査でも見つかりませんでした。逆に第6次調査まで見つからず、第7次調査で新たに見つかったクモは 28 種います。この中のスジブトコモリグモ、カガリビコモリグモ、クリチャササグモ、リュウキュウヒメグモ、サダモトヒメグモ、ゴカクケシグモ、ニホンウスイロサラグモ、カラカラグモ、エゾアシナガグモ、シロゴミグモ、ナカムラオニクモ、ヒメフクログモ、クワガタアリグモ、ヤガタハエトリの 14 種はバルーニングによって飛来し、奇跡的に杉並区にやってきた種類と思われます。

（了）

（文・写真：新海 栄一、写真：千国 安之輔）



# 第7次杉並区自然環境調査で確認した主な植物

(文・写真 杉並区自然環境調査 植物調査員 佐藤 康子)

第7次杉並区自然環境調査(以下調査)、都立善福寺公園の植生調査を担当しました。第7次調査で確認した主な植物を報告します。

## 在来種(文章の番号と下写真の番号は対応しています)

- 1) 【イヌケホシダ】 南方系のシダですが、「都市部では他の熱帯性植物に混じって温室に持ち込まれて繁殖したものの逸出が多数報告されている」。分布は、「関東地方以西」の表記です(出典:海老原 淳 『日本産植物標準図鑑 1』 2016、P440)。本公園では湿潤で、明るい、石が近くにあり、夜にあまり温度が下がらない場所に生育していました。
- 2) 【イノデ】 ベニシダ群落の中に生育していました。
- 3) 【マメヅタ】 (都 RD\*1)平成 30(2018)年の第7次調査では確認しました。しかし、その後、周囲が草刈りされ立ち入りできるようになると令和元(2019)年には、なくなっていました。残念です。

以上、1)、2)、3)はシダ植物 [参照ホームページ](#) 「杉並の自然学」>「シダ植物」。

- 4) 【ウワミズザクラ】 平成 29(2017)年に花が咲き、同定できました。平成 30(2018)年にも、花を確認しました。[参照ホームページ](#) 「杉並の自然学」>「植物の MENU」>「あ行」>「イヌザクラ」。
- 5) 【カリガネソウ】 (都:RD\*1)民地と接する場所に出現したので、恐らく逸出と思われます。
- 6) 【キンラン・ギンラン】 (都:RD\*1)両種は以前から確認していますが、盗掘を恐れて第6次調査には記載しませんでした。キンラン・ギンランは花が美しいので盗掘する人もいますが、キノコの外生菌根菌と共生しているとされる種で、ご自宅で育てることはまず不可能です。奇跡的に遺った貴重種です。本紙に記載したのは、このような事情を知っていただきたかったからで、地元の宝として次世代に遺していただきたいと願っています。



1) イヌケホシダ



2) イノデ



3) マメヅタ



4) ウワミズザクラ



5) カリガネソウ



6) キンラン

## 外来種 (文章の番号と下写真の番号は対応しています)

- 1) 【メリケンガヤツリ】 (生被防:重点対策-84 \*2): 上池の池縁に広がっています。
- 2) 【アレチヌスビトハギ】 (生被防:総合対策-121 \*2): 6次調査では下池のみでしたが、第7次調査では上池でも確認しました。「一度侵入されると、頑丈な根茎のため、駆除が困難」で「付着しやすい果実で、種子の分散能力が高い」とされています。「ひつつき虫」と呼ばれる果実を持つ植物は、人や散歩の犬などで、分布を拡大しています。
- 3) 【オオキバナカタバミ】 (生被防:総合対策-122 \*2): 「じわじわと広がっている。一度入り込むと駆除が難しい。家畜に有害」とされています。根部の鱗茎が分離して増えるタイプの繁殖生態をもちます。
- 4) 【キクザキリュウキンカ】 上池・下池で広がっています。花が美しいので、駆除し難いのが現実です。
- 5) 【ミツカドネギ】 ここ数年でじわじわと広がっています。
- 6) 【マツバウンラン】 上池の護岸工事後、平成30(2018)年に確認した初認の植物です。外来種は数年で消失する種と、繁殖力が強く徐々に分布拡大する種があります。マツバウンランは杉並区ではあまり見かけないので、前者の可能性ががあります。

### 参照ホームページ

「杉並の自然学」>「帰化植物戦略」(14: アレチヌスビトハギ)

「杉並の自然学」>「生物の多様性」>11番の「市街地」の下部に、生被防\*2に指定され、杉並区で確認した外来種が番号順に掲載されています。



1) メリケンガヤツリ



2) アレチヌスビトハギ



3) オオキバナカタバミ



4) キクザキリュウキンカ



5) ミツカドネギ



6) マツバウンラン

### 参考図書

\*1 『レットデータブック東京都 2013』、東京都発行の「区部」に記載された種

\*2 環境省、平成 26(2014)年発表、「生態系被害防止外来種リスト」(本文略:生被防)

### 参照ホームページ

杉並の自然学 (<http://sas2005.eco.coocan.jp/>)・・・本文著者によるホームページ

(了)